



影をば踏^{つら}まで、面をや踏まぬ

前号に続き、今回は『大鏡』の道長に関する話題を紹介してみよう。出典は『人生をひもとく 日本の古典 第四巻「たかかう」』（岩波書店、2013）。このシリーズ、以前にも紹介したのだが、古文が好きな人にはぜひ推薦したい。教科書に載っている教材から、教科書では学べない教材まで、その作品の眼目となる一節が、テーマに沿って分かりやすく、かつ奥深く紹介されている。

＊

「影をば踏まで、面をや踏まぬ」

これは、若き日の藤原道長のことばとして、『大鏡』が伝えるものである。

ある時、道長の父兼家が、息子たちを前であつた。「藤原公任は、どうしてあのように何もかもできるのか。うらやましい。わが子たちが公任の影さえ踏めそうもないのが残念だ」。公任は、道長たちと同年輩の男である。これを聞いた道長の兄、道隆と道兼は、父の言葉に納得しているらしく、いかにも恥ずかしそうにして、何も言えないでいる。そこで、若い道長が言い放った言葉である。「後を追いかけて影なんか踏むもんか、真っ正面から面を踏んづけてやるんだ」。いかにも鼻っ柱の強い、後年大権力者になる男の若き日の面目躍如といったところである。『大鏡』はこれに続けて、「まことにさこそおはしますめ。内大臣殿をだに、近くてえ見たてまつりたまはぬよ（実際に、そのようになられたようすな。公任殿は、内大臣殿（道長の息子、教通。公任の娘婿）にさえ、あまり近くでござ対面になれないのですよ）」と述べている。もっとも、政治家としての道長の官位

は常に公任よりも上だったので、兼家の嘆きには、物語の誇張があるだろう。

ここには、若い道長の激しい闘争心やみなぎる気迫が力強く表されている。道長にまつわる、数ある自信家、怖い物知らずのエピソードの中でも、代表的な一つといえるだろう。ここに、若者特有の生意気さを感じて鼻白むか、少壮の覇気を感じて爽快に思うか、人により、また時により異なるであろう。いづれにしても、そこにあるのは、単なるむき出しの闘争心というだけではなさそうだ。少し、表現そのものに注目してみよう。この簡潔な一句は、「影」と「面」という対を用いながら、七・七のリズムを持った、実に巧みな言い回しになっている。父親のぼやきにシュンとなってしまったふがいない兄たちを尻目に、当意即妙に負けじ魂を表現した、その表現そのものこそ、このエピソードの眼目なのであろう。ただ単に「絶対あいつに勝つ」などと叫んでも、そんなことばは残りはしない。この秀句というべき表現に、道長という人物が凝縮している。文は人なり、との感を深くせざるをえない。そうした道長像を鮮やかに描き出した『大鏡』の表現力はすばらしい。

＊

みごとに解説である（執筆は青山学院大学教授高田祐彦先生…って、私の大学時代の一個下の後輩、高田くん）。道長のすごさが、実はこの「影をば…」という表現に凝縮しているという指摘は、まさにその通りだろう。

こういう解説に触れながら『大鏡』を読み進めると、この作品の不壊の魅力が一段と輝きを増すのである。